

あとがき～現代語訳にあたって

私が豊橋商業高校に『帳合之法』のあることを知ったのは、平成十二年四月同校に着任してしばらくしてからであった。それは同校の同窓会博物館のガラスケースの中に大事に保管されていた。ただ私はそれを見て、学校の生徒や職員あるいは来校者に気軽に見ていただきたいということと、大変貴重な資料であり、セキュリティの面から校長室へ移すことを決めた。以来、機会あるごとに同校がこの貴重な書物を所有していることを公言し、数多くの方々に見ていただいた。

また、豊橋市美術博物館の学芸員の方に調べていただいた結果、「木版による印刷であるから、多分百部から二百部の発行であろう。その中で、初版本が全四巻揃っていることは珍しいことである。福澤諭吉研究の貴重な資料である。保存状態も良く、大切にしてください。」との回答をいただいた。

本書のことは、私が大学一年生の時簿記を勉強する中で、福澤諭吉が複式簿記をアメリカから日本に初めて紹介した本であるということを知っていた。しかし、それ以上のことは知る由もなかった。ところが、私が同校に着任し、その原本が自分の目の前にあり、手にとって見ることのできることを知って少なからず興奮を覚えた。

こうした歴史的に有名な書物は、ややもすると、その題名や著者は知られていてもその内容まで知ることは、意識的にまた意欲的に接しないとなかなかできないことである。私自身がそうであったように、商業教育、簿記教育に携わる諸兄も本書の存在は知っていても、直接読む機会を得た人は少ないのではないかと思われる。

私が現代語訳すること自体まことに僭越であり、また、無謀なこととは解っている。私は簿記史の研究者でもなければ、福澤諭吉について深い知識を持っている訳でもない。また、明治時代の言葉を正確に訳すことに自信があるわけでもない。ただ、簿記教育に長年携わってきた者として、その内容を現代語に訳しておくことも多少の価値があるのではないかという思いで、「現代語訳」としてここに残す次第である。

「天は人の上に人を造らず人の下に人を造らずと言えり。」これは誰もが知っている福澤諭吉の『学問のすゝめ』の冒頭に書かれている一文である。この本は、明治五年二月から同九年十一月までの間に十七編に亘って書かれた彼の代表作品である。

その初編には次のように書かれている。

賢人と愚人との別は、学ぶと学ばざるとに由って出来るものなり。・・・ただ学問を勤めて物事をよく知る者は貴人となり富人となり、無学なる者は貧人となり下人となるなり。・・・実なき学問は先ず次にし、専ら勤むべきは人間普通日用に近き実学なり。例えば、いろは四十七文字を習い、手紙の文言、帳合の仕方、算盤の稽古、天秤の取り扱い等を心得、なおまた進んで学ぶべき箇条は多し。

更に、二編にも次の件【くだり】がある。

経書史類の奥義には達したれども、商売の法を心得て正しく取引をなすことと能わざる者は、これを帳合の学問に拙き人と言うべし。・・・帳合も学問なり、時勢を察するもまた学問なり。

日本が近代国家へ生まれ変わるためには学問が大事である。そしてその学問とは、科学的思考に立脚した実務や日常生活に密着した習い事などであると諭吉は説いている。今日の日本の教育理念にも通ずる考え方であり、また、長年商業教育に携わってきた者として大変勇気づけられる言葉である。

『帳合之法』初編が明治六年六月に発行され、全四巻の出そろったのが丁度一年後の明治七年六月ということを考えれば、諭吉翁の頭の中では、『学問のすゝめ』で書いたことを『実学のすゝめ』として、具体的にこの『帳合之法』を世に出したと見ることもできる。その意味では、私は『帳合之法』は『学問のすゝめ』の続編、あるいは姉妹編であると考えている。

十九世紀のドイツの詩人ゲーテは、複式簿記を「人類の創造した最高のものの一つである」と言っている。また、明治時代の熱血詩人と謝野鉄幹は「簿記の筆とる若人にまことの男子の子君をみる」と詠っている。

三十五年間にわたり簿記教育に携わってきた私としては、人類の創造した最高傑作を生徒に教え、また、百三十数年前に、我が国の近代国家を夢みた若きリーダーによって書かれた『帳合之法』の原本をわが手に

して読むことのできたことは至上の喜びである。

将来の日本を見据え、諭吉の欧米社会に追いつけ追い越せの強い意気込みは、初編凡例のみならず全編に亘って感じられた。各編毎に系統的に大変解りやすく構成されており、複式簿記をこの国に普及させることが豊かな日本を創るという信念であった。明治六年に『帳合之法』が出版され、これを本に全国各地で簿記教育が行われていった事実は当に感動に価することである。因みに、明治二十三年には東京に四十七校があったというから驚きの何ものでもない。今日の日本の繁栄の礎は、諭吉によって創られたと言っても過言ではないと思う。

現代語訳する上で、私の力不足から次の点には大変苦勞した。

☆文章に句読点がない。

☆筆書きの部分もあり、達筆で読むことが難しい箇所があった。

☆計算間違いが結構あった。これはその都度訂正をしたつもりである。

原本の大きさはA5版なので、この本も同じ大きさとした。また、字は資料にもあるように十五ポイント位の相当大きなものである。ただ、ここでは通常の一〇、五ポイントを基準とした。

更に、文中のいろいろな括弧については、原本中に使用されている括弧は全て〔 〕を使用し、他の括弧は読みやすくするために適宜使用した。

この度私が『帳合之法』を現代語訳するにあたり、友人の歴史学者、東京女子大学水藤眞教授には大いに勇気づけられ、また同僚の国語学者、名古屋外国語大学の佐々輝夫教授にはいろいろ相談に乗っていただき大変お世話になりました。心から御礼を申し上げます。

平成二十一年十月